

京田辺校地25年のあゆみを振り返って

大学京田辺校地総務部長 高田 芳樹

はじめに

本年4月、1986年の京田辺校地(當時は田辺校地、以下同様)開校から25年を迎えた。ようやく四半世紀を経たわけであるが、この間のあゆみを大学を中心に振り返ってみる。私はたまたま開校の直前に京田辺校地に赴任し、その後約10年間勤務したこともあり、開校前後を中心に個人的な記憶も若干含め記してみた。

現在、大学の京田辺校地では約79万㎡の土地に、大学院生を含む約1万5千人の学生が学んでいる。文化情報、理工、生命医科学、スポーツ健康科学、心理学、グローバル・コミュニケーションの各学部及び関連する5研究科がこの地に本拠を置いている。文、法、経済、商の各学

部の1・2年次生も2012年度までここで学修することになっている。

開校まで(1)

本学は戦後長い間校地不足に悩まされていた。多くの学生(1960年度で約1万3千人)を擁しながら狭隘な今出川・新町の両キャンパスにほとんどの教学施設が集まっており、教育研究条件の改善、新たな展開も不可能な状態であった。特に中心校地不足により、大学院等の充実に凶れない事態となっていた。

こういった事情を受けて、各校及び理事会で種々検討を重ねた結果、1966年及び1968年の2度にわたって当時の京都府綴喜郡田辺町の土地約100万㎡を購入した。この土地に現在、大学、

女子大学、国際中学・高校のキャンパスが展開されている。

土地購入後、学園紛争等もありしばらくの間手付かずの状態であったが、1970年代の後半になってようやく京田辺の土地利用に向けて動き出すことになった。開校までの主な動きは左記のとおりである。

- ・1976年2月 「教育条件の改善基本方針」 大学評議会承認(具体的な検討開始)
- ・1977年2月 「田辺校地整備基本計画」 大学評議会承認
- ・1980年3月 田辺校地開発造成工事許可 8月 造成工事着工
- ・1982年3月 「田辺校地整備実施計画方針」 大学評議会承認
- ・1984年3月 「田辺校地整備実施

計画」 大学評議会承認

↓骨子は、(1)全学部第一部1年次・2年次生の授業を1986年度より田辺校地で開始する (2)工学部3年次・4年次生、大学院工学研究科および理工学研究科の移転は第2段階の計画対象とする

- ・1985年1月 起工式、2月 建築工事着工
- ・1986年3月 竣工式

開校まで(2)

関係者の記録によると、敷地造成に先立ってまず治水及び防災関係の工事が必要であったようである。これは山を削ることにより水の流れが変化するためである。調整池の建設、普賢寺川の拡幅工事、分水嶺(興戸側と多々羅側)の工夫等々である。また、造成にあたって地元との間で、トラックの通行問題もあり、土は校地外へ持ち出さないという約束をしていたため、山を削って出た土は谷へ埋めるという方法を取った。

造成開始から4年半、1985年の1月9日、ようやく両大学合同の起工式にこぎつけた。場所はラーネッド記念図書

館建設予定地で、林田京都府知事をはじめ、府・町・建設関係者や地元代表等約250名の出席を得て行われた。2月には建築工事に着工し、1年2か月間の突貫工事が始まった。延べ30万人の工事関係者が投入され、工事は順調に進み大学だけで40数棟の建物(延床面積約9万9千㎡)が実質わずか1年でできあがったことになる。86年3月27日には女子大学の恵真館で合同の竣工式(開校式)が挙行された。式典には全国の学校関係者をはじめ約1,000人が集い、竣工・開校を祝福した。総事業費は大学だけで約240億円であった。

通学について

国際高校は1980年に開校していたが、86年4月からは大学・女子大が加わり、1万3千人近くの学生・生徒が通うことになり、通学に係わる問題・課題は早い時期から懸案となっていた。

まず通学経路であるが、当初は近鉄三山木を通学のための主たる駅とする案が有力であったようだが、紆余曲折を経て1984年3月には興戸を主たる通学駅とすることが決定されている。興戸に決

定後、同社としては駅を南側に移動させ、現在の東西の通学路と駅を直結させるとともに、ホームを拡張して6両編成の停車も可能とさせる予定にしていたが、地元との関係もあり実現しなかった。現在の橋上駅は開校後の86年9月に完成している。また、JR・府道を跨ぐ陸橋を含む通学路そのものは開校前日の3月31日に完成した。この通学路は工事中は4車線であったが、2車線にし北側に非常に広い歩道を設けたという経緯がある。

JR(当時は国鉄)の新駅「同志社前」についても、関係者の尽力により開設が決定し、1986年の1・3月の工事期間で4月1日に完成している。現在ではJRも大阪方面からの学生輸送の大動脈になっている。

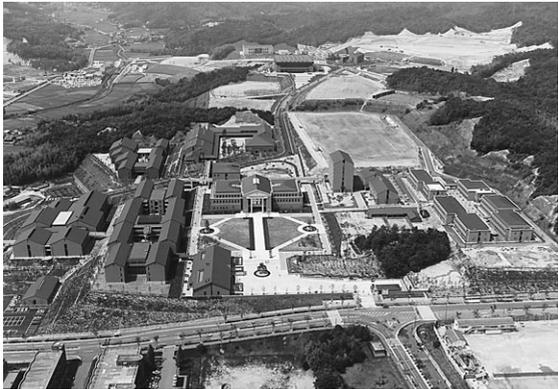
開校

1986年4月1日、京田辺校地開校。土地を取得してからでも20年の時が経過していた。1875年の同志社英学校開学以来の大事業であった。この校地で学ぶのは、前述のとおり全学部第一部1年次・2年次生約8,600人である。2年次生については今出川校地からの移動

である。

4月5日には初めての入学式がデイヴィス記念館で2回に分けて挙行された。当日の京都新聞夕刊の記事には「同志社大学田辺キャンパスで5日、初の入学式が行われ、学生、キャンパスともに新しいスタートを切った」と記されている。授業開始は12日であった。

開校当初について今でも鮮烈に記憶しているのは、夕刻である。当時はほぼ完



開校の頃の校地全景（1986年）

全な4講時制であったので4時半を過ぎるとほとんどの学生がサーツと引き上げ、5時頃にはキャンパスは閑散としていた。また、たまに大雨が降れば随所で小さな土砂崩れや水漏れ等が発生し、施設部は対応に追われていたようである。しかしながらキャンパス全体としては授業も含め、ほぼ順調にスタートしたのではないかと思っている。その後数年間は全国各地から大学関係者を中心とした見学者が引きも切らない状態であった。この年の10月には第4工区と呼ばれていた、校地の一番西側の体育施設群が完成し、第1段階の建設工事は完了した。これで既に完成していた体育施設を含め、日本でも有数の43種目ものスポーツが可能な35の施設が16万㎡の土地に集中的に整備されたことになる。

工学部統合移転

前述のとおり京田辺移転の第2段階として、1994年4月には工学部・工学研究科、理工学研究所の移転が完了し、工学部の3・4年次生及び工学研究科の大学院生が京田辺で学ぶことになった（計2,150人）。同時に学科の新設・

改組がなされ、全国初の知識工学科の新設を含め7学科体制となった。

工学部は学生・教員の増加による教育・研究環境の狭隘化等に長年悩まされており、京田辺校地への移転により一気に問題の解決を図り、さらなる発展も目指す必要があった。また、実験実習等を伴う学部の性格上、1986年からの2校地制は大きな問題であった。

1990年6月には統合移転が大学評議会です承され、92年7月から順次建設工事が始まった。94年3月12日、工学部関連施設11棟、新教室棟（恵道館）、新厚生施設棟（紫苑館）が竣工を迎えた。延床面積は約4万1千㎡である。第1段階で既に完成していた1・2年次生用の実験実習施設と合わせて物理的にも統合移転が完了したことになる。

これよりやく工学部のみであるが、1年生から4年生までがいるキャンパスとなった。夕刻以降の学生の激減も多少はましになったように記憶している。

その後の発展

本号の座談会記事と重複する部分もあるが、工学部統合移転後の発展・変化に

めの宿舍として、また課外用のスポーツ施設として利用している。

この25年間における景観上の一番大きな変化は、逐次建設された建物群を別にすればキャンパスの樹木である。大きく茂った豊かな緑は25年の歳月を確実に感じさせてくれる。

現在のこのすばらしいキャンパスは、地域の方々や京田辺市のご理解の賜物であり、また、なにより多くの教職員の思いと努力の結晶であろう。すべての関係者に敬意を表し、感謝したい。2013年度には文系の1・2年次生が今出川校地に移ることになるが、その後はかなり性格の異なった新生「京田辺校地」になる。次の25年のさらなる発展に期待したい。

〈主な参考文献〉

- ・同志社大学広報『同志社時報』
- ・学校法人同志社編『同志社田辺校地30年の歩み 1965～1993』 1995
- ・谷口謙士郎著『同志社大学田辺キャンパス開校までの覚え書き』私家版 1997



校地全景（2008年）

ついて簡単に触れてみたい。1994年以降しばらく大きな変化はなかったが、2005年の文化情報学部の新設を皮切りに京田辺を拠点とする学部・研究科が続々と誕生し、現在、冒頭に書いたように6学部、5研究科がこの地にある。わずか6年半前までは工学部しかなく、隔世の感がある。学部・研究科の新設等は左記のとおりである。

- ・2007年 文化情報学研究科開設

京田辺校地での30年

—国際中学校・高等学校の歩み—

国際中学校・高等学校校長

川井 国孝

開校まで

同志社創立100周年記念事業の1つとして「帰国子女教育問題への対応」が取り上げられたのは、今から約35年前のことでした。その後法人内の組織で検討を重ねられ、開校1年前の1979年4月、国際高等学校開設準備室は、スタッフを教員9名、職員3名に増員し、事務室を女子大学の「梨の木学舎」に移転して本格的なスタートを切りました。私はこのときから準備室のメンバーに加わりました。1979年9月、国際高等学校開設準備室は「梨の木学舎」から田辺校地のプレハブに移転し、校舎建築が進められていた様子を見ながら、間近に迫ってきた開校に向けて準備を進めることになりました。関西には入試制度、授業形態、教材などについて参考に行ける先発校は一つもなく、ほとんど自分たちで

一から作り上げていかなければなりません。どんな生徒が来てくれるのか分からない状況で授業の計画を立てるのは想像以上に大変な作業でした。

12月の認可により、同志社国際高等学校が正式に誕生しました。早速願書の受付をはじめ、何とか1980年2月16日に最初の入学試験を実施することができました。そのときにはまだ田辺の校舎が完成していなかったため、法人本部の皆さんに応援をいただき、同志社大学新町校舎をお借りして最初の入学試験を行いました。

田辺校地（現在の京田辺校地）の様子

国際高校が開校したときの田辺校地周辺は、今とは全く違う静かな（寂しい）ところでした。現在のJR同志社前駅もありませんし、専用通学路の陸橋もありません。同志社前駅付近のコンビニや飲

食店、ゲームセンター等は何もなく、現在のJRの駅あたりにあった小さな喫茶店を、国際高校の教職員がよく利用していました。また生徒は、道路沿いの小さな駄菓子屋さんによく立ち寄っていました。とてもどかな風景でした。

現在の同志社前駅から大学の正門に向かって登る坂道を通るのは殆どが本校の生徒・教職員と同志社住宅に住んでおられる方でした。今は人通りが絶えない坂道も、当時は街灯もなく人通りもほとんどなくとても寂しい道だったので、暗くなってからの下校は危険だという配慮から、本校の下校時間は夏期17時30分、冬期は17時に決められました。

当時の田辺キャンパスでは、大学は造成が始まるうとしていたところで、女子大学は宿泊のできる小さな研修所と大きなグラウンド、そしてテニスコート1面があるだけでした。現在の山手幹線の道



1981年頃の田辺校地
右が大学、左下が女子大学の用地です。

路は大学の北門あたりで道路が終わっていて、南から来た車は、今の大学正門前ですべて東に回って坂を降りて駅の方に行かなければなりません。当時はほとんど車が通らなかつたので、山手幹線の道路上でクラス写真を撮るといってもできました。

開校の日

1980年4月14日、正面玄関のラウンジで同志社国際高等学校の開校式と第1回入学式が行われました。体育館も講

堂もなかったもので、唯一少し広いスペースであったラウンジにパイプ椅子を並べて臨時の式場を設営したものでした。

関西で初めての帰国生徒受け入れ専門校の開校ということで、関西のほとんどのテレビ局が入学式取材にこられました。新入生の宣誓や校長の式辞の際は驚くほど近距離で撮影をしておられたので、式の厳粛さは犠牲になりましたが、それほど注目されていたということが言えます。入学式後の各ホームルームの様子や生徒、教師へのインタビュー、保護者へのインタビューなど長時間にわたる取材が行われ、その日の18時からの報道番組では、どのチャンネルでも本校の開校の様子が放映されていました。

開校後の歩み

私たち教職員は、帰国生徒教育の先覚校を見学したり書物を読んだりして、帰国生徒とはどのような特徴を持った生徒達なのかを色々調べて準備をしていました。しかし、実際に生徒達が来てみると、生活経験や文化の違い、生徒の個性や学習状況、言語的な個人差はとて大きく、今流行の言葉で言うと、「想定外」の連続でした。ある程度持っている予備知識を参考にしながらも、目の前にいる個々の生徒にその場で対応していくしかあり

ませんでした。

日本語の授業が分からずに髪の毛が白くなった帰国生徒、ポルトガル語で育ちすべての授業をカセットレコーダーで録音し、何度も聞き直して勉強している生徒、英語も日本語も流暢で難なく日本語の授業に適應していく生徒、英語が得意科目だったから本校を選んだのに帰国生徒の英語力にショックを受けて立ち直れない優秀な一般生徒、学校中のいたるところで本当に色々なことが起こっていたのです。これらの経験の積み重ねにより、帰国生徒教育の本質は、多様な一人ひとりにきちんと対応することだということを確認できました。このことにより、本校では国内一般生徒にも質の高い教育を提供しています。

授業以外の面でも生徒達のエネルギーは非常に大きなものがありました。全ての学校行事には前例がなく、何もかも自分たちで企画立案して行かなければなりません。2学期に完成した体育館で行った最初の体育祭では、各クラスが工夫を凝らしてマスキングの発表を行いました。全員が旅館で借りてきた浴衣を着て花笠音頭を踊ったり、フォークダンスやジャズダンスをしたり、組み体操をしたり、各クラスごとにそれぞれの個性が発揮された1年目の体育祭でした。

体育祭のマスゲームや文化祭の色々な催しは国際高校の伝統として、毎年工夫を重ねながら現在まで引き継がれていきます。

中学校の併設

本校はもとも中学校と高等学校を併設する計画でしたが、準備段階の諸般の事情により、高等学校のみでのスタートとなりました。しかし、学内の他の中学・高校では全て中学校・高等学校の一貫教育を実施しています。また、日本に帰国した生徒達が高校入学までの間に、日本の公立中学校に入学し、適応がうまくいかない可能性もあり、中学1年生から高等学校2年生まで、全ての学年で入学できるようになることは、受け入れ校としても非常に意味のあることでした。そこで、1986年から中学の設立に向けて準備を始めましたが、中学校を併設するためには、解決をしなければならぬ多くの課題がありました。京都府と文部省の認可、建築費用の準備、理事会の承認、田辺町との折衝、周辺住民との折衝、これらの課題を解決し、1988年4月に同志社国際中学校を開校しました。

学内の他の中学・高校では、中学段階でほとんどの生徒を入学させて、高等学校段階では補充程度の募集を行うだけに

なっています。しかし、本校は帰国生徒受け入れという社会的な責任があるため、高等学校段階で一定数を募集しなければなりません。そのため、併設する中学校の定員は、1学年90名（帰国生徒60名、一般生徒30名）となりました。

礼拝について

本校は、開校以来礼拝を守ることとても大切にしてきました。しかし、校内には300人程度が入れる集会室が一つあっただけなので、高校3学年が揃った1982年度には全校生徒が入れる場所がなくなり、とりあえず会議室にパイプ椅子をたくさん並べ、1学年が入れる場所を造り、時差をつけて毎日3つ（2つは同時に別の場所）の礼拝を行うことと、全学年が毎日礼拝を行うことができました。その後、生徒数が増え学年によつては隔日礼拝にせざるを得ないときもありましたが、1988年秋には、同志社女子大学の構内に田辺校地の共通施設である新島記念講堂が完成し、1989年度からは高校生全員が一堂に会して新島記念講堂で毎朝の礼拝を守れるようになり、このときから中学生も高校生も毎朝礼拝により学校生活を始めることができるようになりました。本校の礼拝は、そのときから各クラスの宗教委員が

交代で司会を受け持つっており、そのほかにも色々な宗教行事のときには宗教委員が中心となってその活動を支えています。

コミュニケーションセンター と5日制カリキュラム

公立の学校で週5日制が部分的に進み始めた1995年、本校では大きな二つの動きがスタートしました。一つは5日制のカリキュラムの具体的な検討を始めること、もう一つは生徒数の増加により手狭になってきた図書館を中心とする新たな建設を行うことでした。

新カリキュラムについては、単に5日制にするためだけに各科目の時間を調節するのではなく、本校が育てたい生徒像の確認から始め、そのためには各科目ごとにどれだけの授業時間数が必要か、という発想で作業を進めました。また、土曜日については、学校内だけの活動ではなく、広く世間の受け皿を利用し、生徒の幅広い体験を実現するために、授業を行わないこととしました。実際には社会の受け皿はあまり整備されなかったもので、現在、土曜日の活用について検討を始めているところです。



コミュニケーションセンター

できるものになるように計画を進めました。従来の図書館を越え、図書、新聞、視聴覚教材、インターネット等のあらゆる学習情報が一つの場所でトータルに活用でき、そして学習の成果を発信して、世界中とつながった学習空間を目指しました。建築のための委員会を100回近く開き、細かな検討を重ね、設計会社、建築会社のご協力を得て、1997年の夏に円形で総ガラス張りのコミュニケーションセンターが完成しました。同時に、中学校の礼拝ができる多目的コミュニケーションホール、念願の校内のコミュニケーションカフェ、そして雨でも色々な

活動の場となるコミュニケーションプラザなども完成し、本校の教育活動の拠点となるコミュニケーションコンプレックスが完成したのです。

コミュニケーションセンターは、「最も先進的な学校図書館」として各方面で高い評価を受け、色々な方の見学や取材がありました。評価されたのはそのハードウェアだけではなく、むしろ日常的に授業の中でどどん利用している本校の教育内容でした。

今後の展望

同志社大学附属の二つ目の小学校として、同志社国際学院初等部（以下DIA）が2011年に木津川市に開校しました。DIAは日本語・英語のバイリンガル教育を行う小学校で、この小学校を卒業した生徒達は、本校の中学校に推薦進学してくるのが最も自然であると考えます。そこで、2009年度から本校とDIAの間で連絡会を定期的に開催し、お互いの教育内容について共通理解を深め、DIAから本校の教育に自然な形でつながるように準備をしています。

本校は帰国生徒受け入れ校の社会的な責任があるので、外部募集を大きく減らすことはできません。従って、DIAの

卒業生の受け入れにあたり、少し定員を増やさなければなりません。それには申請等の対外的な手続きが必要になり、困難も予想されますが、本校の発展のために乗り越えて行かなければなりません。また、教室が不足すること、DIAでの先進的な教育との連携を図るためには特徴的な新しい施設がいくつか必要になります。一方、2012年と2013年は中学校と高等学校の学習指導要領が改訂になるときです。本校では、この時期に合わせてFD (Future Design) 委員会を設置し、DIA卒業生の受け入れに合わせて、カリキュラム改訂と建築計画の両面から本校の現状を見直すとともに、将来展望についての検討を、今まさに進めているところです。

30年間の帰国生徒教育の経験から、本校では「多様な生徒の一人ひとりに、きちんと対応する教育」を提供します。そして、他者の存在を認め、尊重し、対等に意見をのべることができる、真のコミュニケーション能力を持ち、国際的に活躍できる人材の育成を目指しています。

2015年4月、DIAからの最初の卒業生が本校に入学して来るときに向かって、本校の教育はさらに新しいステージへと進化をしていきます。